

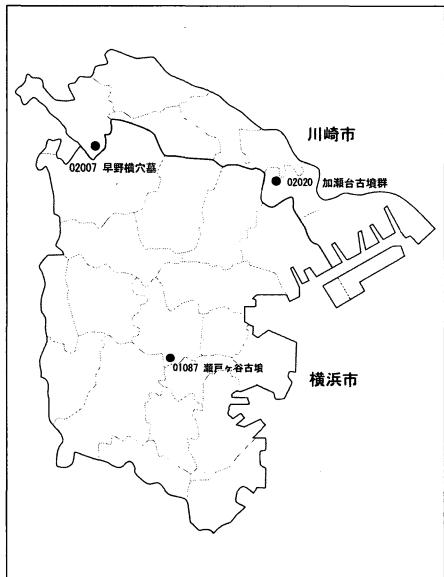
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（4）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第11号には横浜市域にあたる01087番、川崎市域にあたる02007・02020番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01087番：植山 英史、02020番：須藤 智夫、02007番：柏木 善治が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は【調査（踏査）年月】【資料保管場所】【記載内容概略】とし、2. は【（遺跡及び）遺物（遺構）概要】【掲載図書】【掲載図書概略】【小結】などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



01087 瀬戸ヶ谷古墳

02020 加瀬台古墳群

02007 早野横穴墓

第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 02007 早野横穴墓 川崎市麻生区早野

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

昭和47（1972）年5月17日に踏査。「神奈川県史資料編20考古資料」の刊行が1979年であるため、事前の資料調査であると考えられる。

[資料保管場所]

この踏査については、踏査時の略図による記録とメモ、写真のみ残されている。横穴は現地に遺存で、奥壁線刻画のレプリカが川崎市市民ミュージアムにあり。

[記載内容概略]

踏査時の図面 3枚

- ①「川崎市多摩区早野」と書かれた周辺地形略図
- ②「川崎市多摩区早野横穴」と書かれた横穴墓の模式図

「土深し」（羨門付近）

「天井傾斜」（断面天井付近）

「新しいかき方」（奥壁中央人物）

「豊穴家」（中央右の三角描画）

「馬は新古（不）（揃）」（馬列左より2頭目）

- ③「第2号穴」と書かれた横穴墓の模式図

「同行 小川、（川崎文化係長）磯部和男、他1」

「極めて水分が多くしみ出している 床土もひどくしめる、土深し」

「地質泥岩（軟かい）と砂岩との互層。砂岩は薄いものが2-3層みえる」

「側壁の肋状仕上不明瞭」

「棟部分に-----の如く線を引き棟をあらわしている」

とのメモ書きあり。

他

「馬の児童画」 おじいちゃんなどの文字も見える為、おそらくはお孫さんが描いたものであろう。

馬の絵は2枚あり、4才と10才とのメモがされる。赤星氏の人柄が偲ばれると共に、常に研究を見据えていた姿勢が看取される。

「茶の間の風土記とタイトルの付された雑誌切り抜き」 これは、工業都市の奥座敷として柿生・生田が紀行文のように紹介されている。

※これらが入れられていた封筒は昭和47年4月消印の横須賀市博物館より送られた封筒。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

赤星氏の文章である「県史」には、次のように記される。「横穴 昭和47年調査。北から南に突出する丘陵の先端。凝灰岩層に営まれた横穴。アーチ形断面、膨張筒形構造。前幅が狭くなる台形平面。玄室の前が一段低くなつて同形の前室がつき、その前が羨道になる。全長6.64m。玄室前に前室がつき羨道につづく形

は川崎市域に多い形態。奥壁は半円形平面をなし全面に線刻がある。中央上に顔、その左右に不明線刻、下間に三角形であらわした豎穴家の中に顔（人を意味す）、その前に右向きに一列五匹の馬が線刻される。前室から金銅環1、須恵器1出土。羨門外に須恵器長頸瓶3・平瓶1・壺蓋土師器壺1出土。」

残されていた資料は線刻画についての記録が多いため、ここで個別に見ていくこととする。管見の限り過去に知られる論考は3編があげられる。一つは、「三浦古文化」(①)で、二つ目は「東国の横穴墓発見・幡に関する資料」(②)、三つ目は「横穴墓の線刻画」(③)である。

①は線刻画総体を総合的に評価しており、鬱と尻尾を風になびかせて草原を疾駆する5頭からなる馬群や、奥壁中央に描かれた人物画などから牧の情景が連想されている。論考では、周辺に存在したことが考えられている石川牧との関連の追及までされ、歴史背景までも豊かに想起させる。②では、奥壁左上に描画される梯子状の意匠について、仏教に関連させて「幡」としての理解がされている。③は、意匠を個別に解釈し、奥壁中央に存在感を持って描かれる人物顔面像からは、古代の墨書人物画との共通性などから、何度か描画が行われたことが想定され、一元的な理解は困難とした。また、鼻孔の表現から、より古相を呈す人物画を区別し、それらは横穴墓として機能していた時期の描画として捉えている。いずれにしろ、5頭からなる馬群は他地域を見ても類例をみず、特徴的な要素として捉えられる。

遺構・遺物概要の引用文献

- 1984 大竹憲治「東国の横穴墓発見・幡に関する資料」『考古学ジャーナル』No240
- 1975 三輪修三・村田文夫「川崎市多摩区早野横穴古墳線刻画の一考察」『三浦古文化』第18号
- 2003 柏木善治「横穴墓の線刻画について－相模・南武藏を中心として－」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集 築修堂

[掲載図書]

A：1974樋口清之・金子皓彦「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』第9集

B：1974樋口清之・金子皓彦「神奈川県早野横穴の調査」『考古学ジャーナル』91

C：1979神奈川県県民部県史編集室『神奈川県史』資料編

20考古資料

※この他にもシンポジウムや研究会資料として早野横穴の資料は多く使用されている。

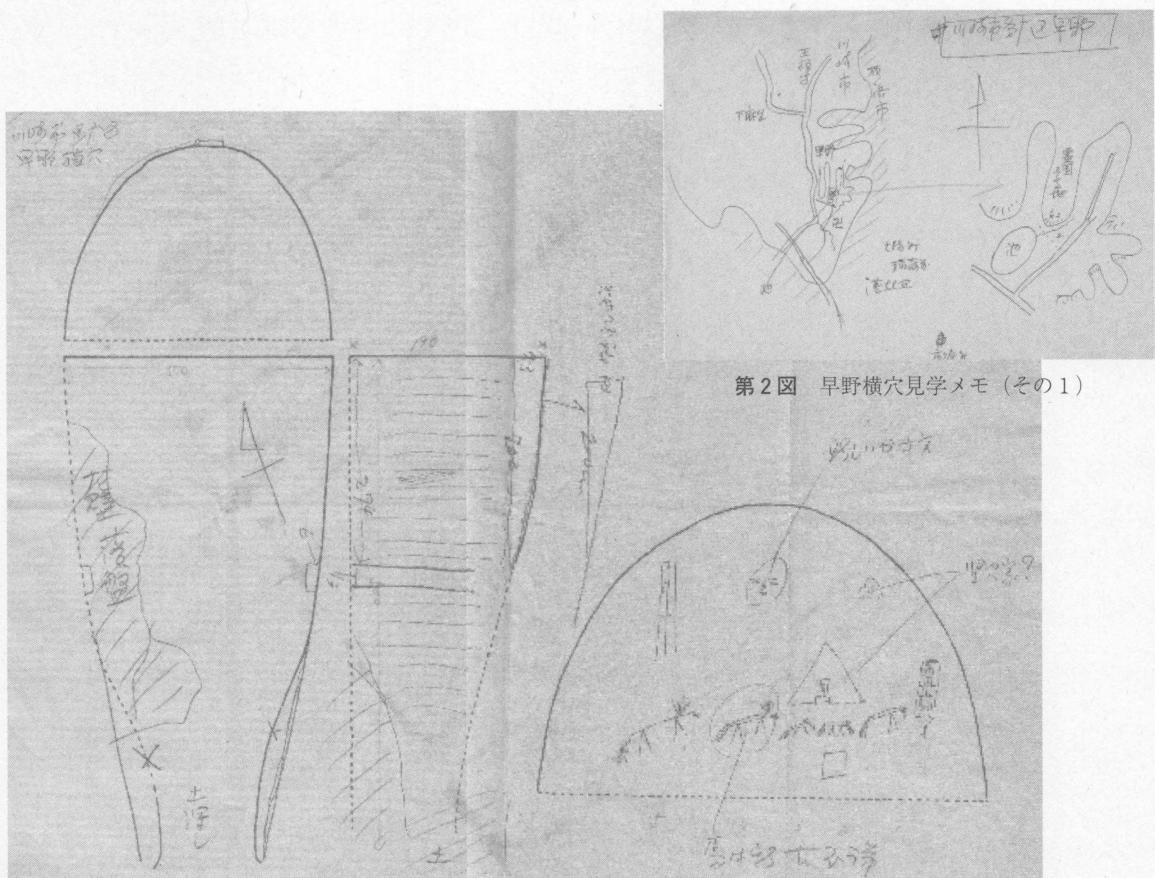


写真1 早野横穴墓遠景（裏面・鉛筆書き2）

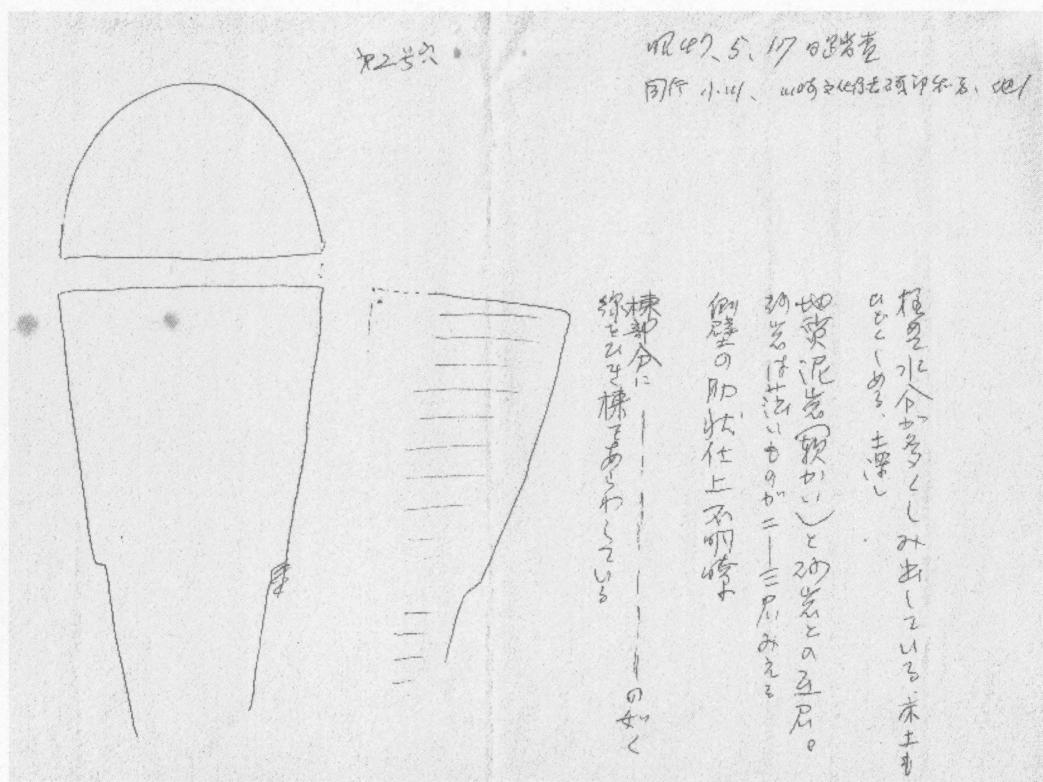
[掲載図書概略]

A：発掘調査報告書、B：早野横穴の調査紹介、C：連なる馬の線刻画の写真が掲載される（『川崎市文化財調査集録』第9集より転載・図版762）、遺跡解説は224頁に記載。

（柏木）



第3図 早野横穴見学メモ（その2）



第4図 早野横穴見学メモ（その3）

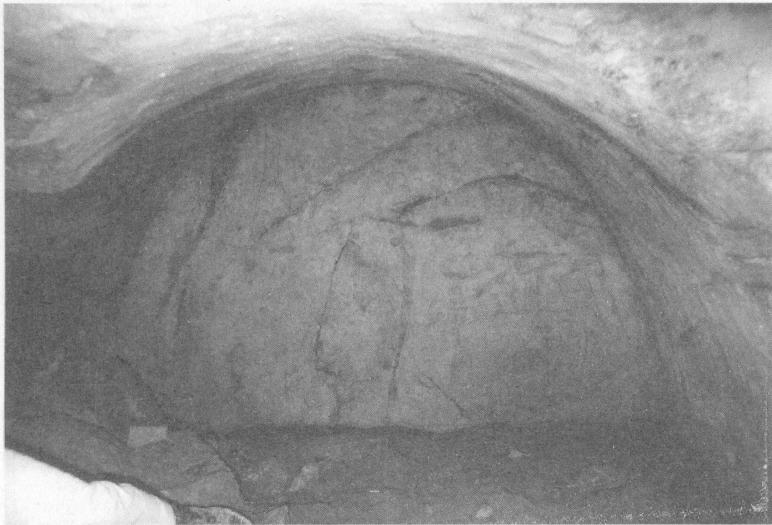


写真2 早野横穴奥壁（裏面・鉛筆書き2）



写真3 早野横穴奥壁線刻画 中央付近人物（裏面・鉛筆書き2）



写真4 早野横穴奥壁線刻画 中央右下付近人物・馬（裏面・鉛筆書き8）



写真5 早野横穴奥壁線刻画 中央右下付近馬・家屋（裏面・鉛筆書き7）

年報番号 02020 川崎市加瀬山古墳分布 川崎市幸区南加瀬

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

資料Aは昭和30年11月29日の日付がある。資料Bは昭和54年11月8日の現地視察の際に記されたメモである。

当初は鉛筆書きで、後にボールペンで修正されている。資料Cはこの現地視察以降のものであろう。

[資料の保管場所]

資料Aの管玉については、小島金之助氏の所蔵であるという。

[資料の概略]

A（第6図）小紙片に記された管玉の略測図である。この管玉は「川崎市夢見ヶ崎古墳」で発見された碧玉製のもので、「何号墳か不詳」と見えるとおり、出土した古墳は不明である。計測値は、長さが1.6cm、径が0.6cmである。穿孔は片面穿孔で、古墳時代のものと考えるのが自然であろう。加瀬台古墳群で碧玉製の管玉を出土した古墳は白山古墳で、北粘土櫛より6個・南粘土櫛より2個・前方部粘土櫛より1個が確認されている。白山古墳の出土品の一部であった可能性も指摘できよう。

B（第7図）「夢見ヶ崎公園内加瀬台古墳群」と題され、それぞれの古墳には注記がある。

1号塚：「頂削平」と見え、左には「慰靈碑」の記述がある。現在の2号墳である。

2号塚：「上に八幡宮」、「昭和7年夢見ヶ崎史跡碑」の記述があるが、これは現在の9号墳である。

3号塚：注記はない。

4号塚：「了源寺古墳」とある。

5号塚：「熊野神社内文化元年碑（富士山碑）／説明版に和鏡（藤原期）／胡州鏡（宋）／鉢／出土／所在鎌倉博物館と記／しているが東博らしい」と見える。現在の浅間塚（旧6号墳）のことである。

6号塚：「天照皇太神社」とある。現在の7号墳で、ここに社殿が建てられている。

7号塚：「封土ほとんどなし」とあるが、現在の8号墳に相当する。

白山古墳：古墳に関する直接の記述はないが、古墳記号の左上には「若干丘陵の残りがみえる」、右には「いまアパート建つ」、下には「このあたり／秋草文壺／出土の由」と見える。

C（第8図）「加瀬山図（公園内立札）」と題された略地図である。資料Bをもとに描かれたものか。

1号墳：注記はない。現在の2号墳である。

2号墳：注記はない。現在の9号墳にあたる。

3号墳：上に「円墳（横穴式石室）」と記され、下には「貝塚附近の傾斜面に横穴数基開口し、その／上方台地に大円墳あり、共に東芝の埋立工事により／削られて湮滅した。」と見える。後者の記述は久保常晴氏の「川崎市加瀬山第三号墳発掘報告」（『銅鐸』8、1952年）から引用されたものである。

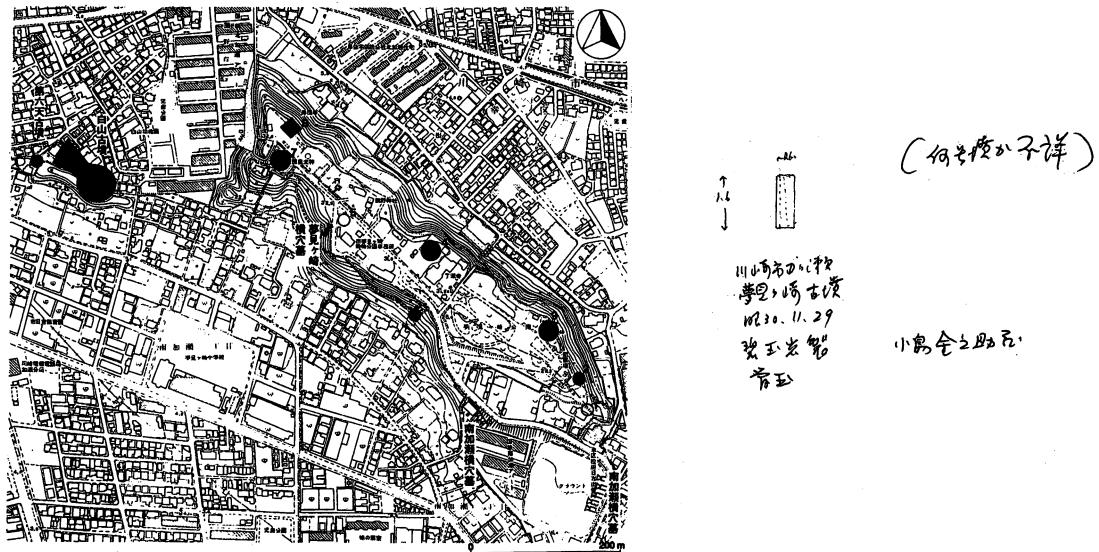
4号墳：「了源寺内／明治43年古鏡／2面直刀1発見」と見える。

5号墳：「亡」とあるとおり、熊野神社より南方の「5号墳」はすでに消滅していたようである。

6号墳：「亡」とあるが、これは資料2の6号塚の位置に相当し、現在でも7号墳として現存する。

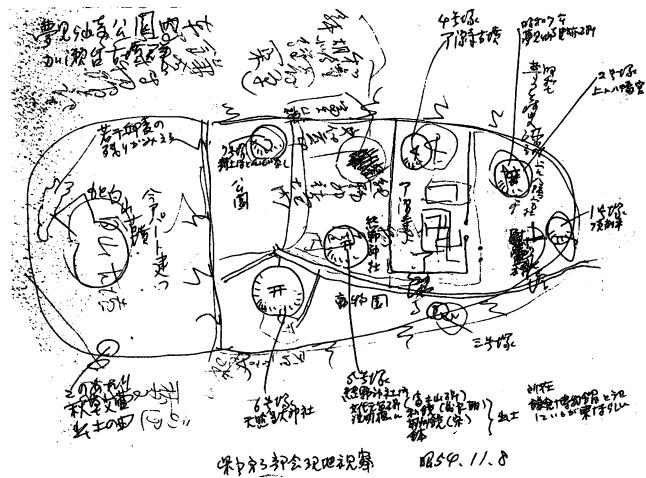
7号墳：「久保氏「加瀬山3号墳報告」に／熊野社北側浅間塚より／大正9年に胡州鏡、草花飛雀文／鏡が発見された」と記されている。この記述も久保氏の前掲書によるものである。本図の7号墳の位置は現在の8号墳の位置にふさわしい。

浅間塚：「大正9年発掘 経塚／（中国宋代鏡、藤原鏡、壺）」と記されている。7号墳と浅間塚は「同じ

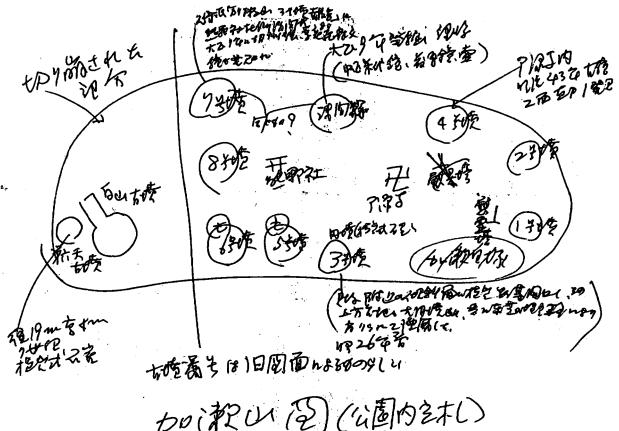


第5図 加瀬台古墳群（番号は古墳番号、白ヌキは想定位置）
浜田晋介（1996）『加瀬台古墳群の研究Ⅰ』を改変

第6図 夢見ヶ崎古墳出土管玉 [資料A]
(約2/5に縮小)



第7図 夢見ヶ崎公園内加瀬台古墳群 [資料B] (約1/3に縮小)



第8図 加瀬山図 [資料C] (約1/3に縮小)

もの？」という注記が両者の間に残されているが、久保氏の前掲書にそのような記述があったためであろう。『神奈川県史』によると、「北加瀬七号墳ともいわれた」ことがあるという。

8号墳：注記なしで、現在のどの古墳を指すかは不明である。

白山古墳：古墳に関する注記はないが、上方に「切り崩された部分」とあり、白山古墳を含む加瀬台の東側部分が湮滅していることを示す。

第六天古墳：「径19m 高4m／7世紀／横穴式石室」と見える。

なお、赤星氏の視察の時点では、すでに現在の古墳番号が付されていたが、赤星氏が当日所持していた資料には旧番号が付してあったので、現在の番号とは違ってメモされることになったと思われる。

2. 記載事項の整理

[他地域に開かれた加瀬台古墳群（第5図）]

南東方向に突き出す加瀬台丘陵は、標高約30~32mの細長い岬のような台地で、標高のわりには周辺の低地部からの視認性が高く、周辺地域から来訪する人々にも意識されやすい場所であった。一方、この地からの景観は現状から想定しても360度に展開するものであったはずで、周辺地域の状況を意識するのにふさわしい場所であった。石野瑛の言を借りれば、加瀬台丘陵は「多摩川デルタの中に忽焉として浮ぶ小丘」であり、古墳の立地環境として、きわめて適した空間であった。こういった空間に存在する各古墳からは、それぞれの時代の地域間交流の様相を考えさせる資料を得ることができる。

前期の4世紀前半に築造された白山古墳の被葬者は、主体部に類例の稀少な木炭櫛を用い、三角縁神獸鏡を伴うことを考慮にいれると、倭王權との特別な関係をもった人物であったと思われる。木炭櫛の葬法から中国大陸との関係のあった人物を想定することも可能であろう。中期になると、8号墳が5世紀第3四半期の方墳とみられ、この時期の方墳が単発的にしか分布しない様相を示すので、非在地系の人物が被葬者であったことを想定できる。渡来人との関係を指摘する見方も提示されている。また、4号墳は5世紀前半の円墳で、六乳一仙獸帶鏡・盤龍鏡がそれぞれ1面ずつ確認されているが、鏡の副葬も他地域との関係を想定できる事例である。2点の竈龍鏡を有する東隣台地の日吉矢上古墳も、やや後出する同時期のものとして、同様のことがいえる。後期に入ると、第六天古墳・3号墳が胴張りのある横穴式石室をもち、その型式上の特徴により第六天古墳が先行するとみられる。それぞれが6世紀第4四半期、7世紀第1四半期の築造と考えられる。胴張りの石室からは、渡来系の人物が関与していたかは別に考慮するとして、北武藏地方からの影響を想定することが可能である。胴張りがあって両石室と類似する古墳としては、多摩川右岸下流域では7世紀中ごろの馬絹古墳、上流域では6世紀第4四半期ごろの北大谷古墳、7世紀第1四半期ごろの稻荷塚古墳があげられる。また、石室の石材に注目すると、第六天古墳は緑泥片岩製の組合式石棺を伴い、これが秩父地方の石材であると指摘されている。また、7世紀第2四半期のものと位置付けられる9号墳の石室石材は軽石質砂質凝灰岩で、逗子市鷹取山山頂の池子層の火山礫岩層から切り出された可能性が高い。前者に連して、1号墳（6世紀代カ）・4号墳・南加瀬横穴墓群では人物？埴輪の出土が伝えられているが、この時期の多摩川中流域右岸には6世紀前半の天神塚古墳、同じく後半の上丸子古墳・日向古墳など、北武藏・上野地方で生産された埴輪をもつ古墳が多く、ここからもかかる地域との交流を推測できる。このように、加瀬台古墳群からは、前期から後期を通じて、地域間の交流を垣間見ることができるのである。

[掲載図書]

関連文献は多いが、管見に及ぶかぎり、本稿で提示した資料の掲載された文献は見あたらない。（須藤）

年報番号横浜 01087／瀬戸ヶ谷古墳（1） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート]

瀬戸ヶ谷古墳は、横浜市のほぼ中央に位置する保土ヶ谷区に所在した全長41mの前方後円墳である。1943年に赤星氏と神林淳一氏が部分的な発掘調査を行い、1950年^(注1)に国立博物館から八幡一郎・三木文雄・増田精一・村井嵩雄各氏、神奈川県から赤星氏とオブザーバーで石野瑛氏の布陣で全面的な調査を行っている。本墳は県内では後期としては最大級の前方後円墳であり、埴輪列や多数の形象埴輪の存在する古墳として著名である。赤星氏は2度の調査に参加しており、調査において重要な役割を果たしたと考えられる。

1950年の調査については、考古学協会年報で概要が報告され、遺物の一部は東京国立博物館の図録等で紹介されているが、本格的な調査報告は作成されていない。遺物は東京国立博物館の展示図録（1986）によると1943年発掘、1949年12月14日に神奈川県教育委員会より購入となっており、組合式の家形埴輪の切妻屋根、帽を被った男子像、帽子形、盾形、鞍形、大刀形埴輪が紹介されている。

赤星ノートの瀬戸ヶ谷古墳に関する資料は、赤星氏の保存状況によって01087、01112、01268-1、01268-2、01268-3に区分され、保管されている。本稿では01087について紹介し、以下次年度以降継続して紹介する予定である。

（注1）神奈川県史考古資料編では、昭和24年の調査と記載されている。三木文雄氏による「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳（1）」『日本考古学協会年報3』昭和30（1955）年では、調査期日は1月11日～25日とされる。続けて記載されている「同（2）」の石野瑛氏の報告では、昭和24年夏から計画が進み、同年11月に発掘許可申請書を提出し許可を得る手続きを取ったと記されている。また、調査期日は（本年＝昭和25年）1月15日～2月3日までとされる。

[記載内容概略]

資料01087 ①写真台紙計5枚・貼り込み写真計10カット

②35mmモノクロネガ3シート（計16カット）

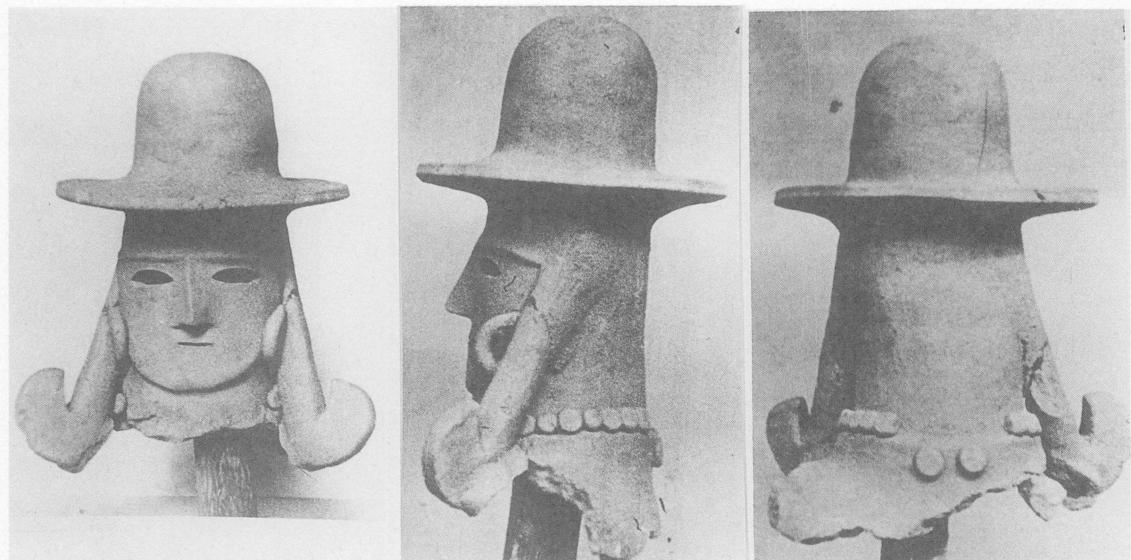
③古墳測量図

①台紙1は現場の写真で、円筒埴輪の出土状態を撮影したものが1枚貼られている。円筒埴輪が倒れた状態で出土したものが中央に写っており、その後方にも別の筒形の破片がみえる。メモに「横浜、瀬戸ヶ谷古墳（戦前）」と記されている。台紙2は人物埴輪の首から上の写真で、正面・側面・背面の3カットが貼られている。帽をかぶった男子像である。メモは「神林淳雄氏撮 横浜市瀬戸ヶ谷古墳（戦前）」とある。台紙3は2枚貼られており、1枚目には円筒の上に帽子が乗る帽子形と4条突帯の円筒埴輪が撮影されている。メモに「上は故神林淳雄氏撮影 地主宅にて昭和19年頃」とある。2枚目は組合式の家形埴輪の屋根部分で、メモに「横浜市瀬戸ヶ谷古墳出土ハニワ国立博物館蔵」とある。台紙4も二枚貼られており、一つは大刀形埴輪、一つは鞍形埴輪である。鞍形埴輪の写真横に「第117図 鞍（横浜市瀬戸ヶ谷）（東京国立博物館）」の文字があり、大刀形の下端にも僅かであるが図録類のキャプションの文字と思われるものの上端が写り込んでいることから、いずれも図録類の写真を接写したものと思われる。メモには「（要掲載許可）横浜市瀬戸ヶ谷古墳出土ハニワ 国立博物館蔵」とある。5枚目はメモに「横浜市保土ヶ谷町瀬戸ヶ谷古墳（前方後円墳）のあった場所の現状写真、削平されて住宅地になっている」とあり、遠景写真が2枚貼られている。丘



横浜、湘南古墳(野原)

写真6 台紙1 (円筒埴輪出土状況)



神林淳太郎氏撮

横浜、湘南古墳(野原)

写真7 台紙2 (人物埴輪)

陵端部の上と裾部に住宅が連なった写真で、丘陵端部に古墳が築かれていた様子がうかがわれる。なお、台紙1と2は裏面が県史作製時に用いられた、「県史考古資料A 神奈川県内出土遺物所蔵者調査表」のカードであり、その他は白紙の厚紙である。

②ネガは、1シートが手書きで瀬戸ヶ谷古墳と書かれた写し込みと台紙3の帽子形と円筒のセット写真及び台紙4の大刀形、2シートが同大刀形と台紙4の鞍形、3シートが遠景となっている。

メモの内容は台紙1及び2は戦前の記述があり、台紙4及び台紙5は戦後の撮影を示すものである。台紙3は、昭和19年頃撮影神林氏撮影とメモ書きされた帽子形と円筒埴輪のセット写真と家形埴輪写真である。帽子形と円筒埴輪のセット写真は、その他の戦後撮影されたと推定される写真と一緒にネガ（シート1）になっている。台紙4の写真が背景にコントラストを持つ美術写真的であるのに対して、本写真の背景は板（壁）で右端に白壁が写っており、人家で撮影されたと思われる。メモ通り、地主宅で取られたものであろうか。また、家形埴輪は破風板が見える角度で取られており、背景は白で右端に角と思われる繋板が写っている。詳細は不明だが、箱形の撮影台かそれに準じるもののに載せて撮影した可能性がある。戦前と記載されている帽子形と円筒埴輪のセットの写真が、図録類を接写したものと同一シートにあり、台紙に貼られた写真は、人物の側面・背面を除き、いずれも県史資料編20で同一カットが掲載されている。また、家形、帽子形、鞍形、大刀形埴輪は『東京国立博物館図版目録 古墳遺物編 関東Ⅲ』（1986）に紹介されているものと同一である。遺物は帽子形の写真も含めて、いずれも付けバックで処理されている。以上のことから、台紙のメモの「昭和19年頃」「（戦前）」というのは、少なくとも本資料ネガフィルムの撮影時期ではなく、発見（発掘）した時期を示すもの、または戦前に撮影した写真を台紙4のように接写したものなどの可能性が考えられる。

③墳丘測量図は2枚あるが、同じものでコピーと考えられる。B5版でかかれているスケールから1/300の図面であることが判る。中央下に「横浜市瀬戸ヶ谷古墳」の手書きキャプ、右下隅に「県史」のメモ、裏の左上端に「保土ヶ谷」のメモがあり、県史資料編20に同じ図が掲載されている。

2 [記載資料の整理]

本一括資料は、一部の写真・図面が県史に掲載され、台紙に県史考古資料Aのカードを用いてることなどから、県史作成時に赤星氏によって整理されたものであろう。県史考古資料所在調査は昭和44（1969）年から開始され、横浜市分については「神奈川県史資料所在目録」（考古の部）考古第11集・同第12集（昭和50年）を中心に記載されているが、本資料に関連する記載事項は認められず、本資料の作成時期は昭和44（1969）年以降、昭和54（1979）年以前の間にあたるが、詳細な時期は不明である。（植山）

[掲載図書]

1979 神奈川県県民部県史編集室『神奈川県史』資料編20 考古資料 解説421 図版731～34

参考文献

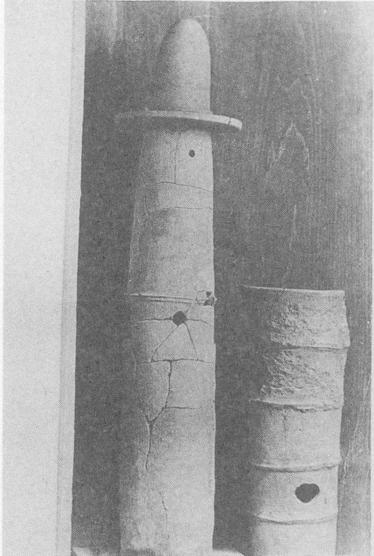
三木文雄「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳（1）」『日本考古学協会年報3』昭和30（1955）年 日本考古学協会

石野映「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳（2）」『日本考古学協会年報3』昭和30（1955）年 日本考古学協会

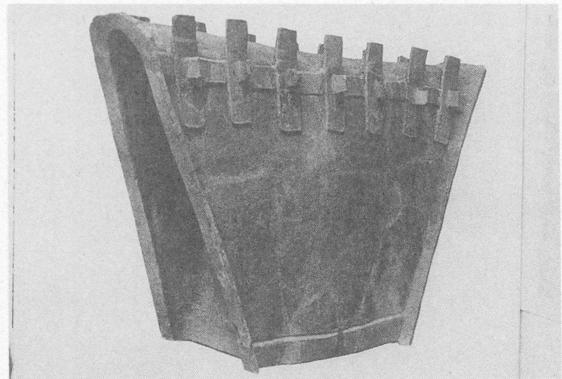
赤星直忠「神奈川県史資料所在目録」第1集 昭和45（1970）年 県史編集室

赤星直忠「神奈川県史資料所在目録」第11集 昭和50（1975）年 県史編集室

赤星直忠「神奈川県史資料所在目録」第12集 昭和50（1975）年 県史編集室



上は 破
神林淳雄所撮影
地主宅にて 1964年秋



横浜市瀬戸ヶ谷古墳出土ハニワ
瓦計博物館蔵

写真8 台紙3 (埴輪・帽子形埴輪、家形埴輪)



横浜市瀬戸ヶ谷古墳遠景
(前が後田坂)のあたり場所の現
状写真、湖平され20世紀半ば
からある

写真9 台紙5 (瀬戸ヶ谷古墳位置遠景)